

連載 呑川むかしむかし (1)

大坪 庄吾

川はどのようにして生まれるのでしょうか。土で小さな山を作ってみましょう。出来たらじょうろで上から水をかけてください。水がかかった山には小さなすじができはじめます。

すじの間を水が流れて、すじの間が少しずつ広がります。水が流れると、土は少しずつけずられて流されます。下のほうには流された土がつもっていきます。川はこのようにして生まれるのです。

もう少し水をかけつづけましょう。つもった土の間にまだ川は流れます。ところが平らになったところでは、川は曲がりくねったり、水のはやさがかわると低いところを探して新しい流れができたりします。川の下流では土があちこちにつもって川はばも広がっていることに気がつくでしょう。川の終点は海です。海にそそぐ川は流れがゆったりとしています。

では、呑川はいつごろどのようにして生まれたのでしょうか。呑川の生まれる前の東京は、ほとんど海になっていました。およそ3万年前の気候は、今よりずっと寒かったのです。

氷河時代とっていて、地球全体が寒くなり、北極や南極の方には海からじょうろはつした水分が雪や氷となって降りつもり、とけないため海水がどんどんへっていきました。

海だった東京は水がなくなり陸地になりました。いま東京湾になっていたところも、水がへって三浦半島の先のあたりでようやく太平洋にそそぐようになりました。東京湾の海面は、今より100メートル以上低くなったのです。その間に多摩川・荒川・相模川などの上流から流されてきた土や石、砂などが東京の各地に積もりはじめました。

およそ2万5000年ほど前ごろから、富士山、箱根山などの火山の活動がさかんになり、噴火した火山灰が関東地方全体にふりつもりました。火山活動が少なくなったのは、1万年前、その間に降りつもった火山灰はおよそ5～6メートル、東京全体が火山灰におおわれました。これを武蔵野（むさしの）台地とっています。台地を50センチもほると赤土（関東ロームともいう）という火山灰の土が今でもでてきます。

東京でも今の軽井沢あたりと同じくらい寒い気候でしたが、火山灰の上に降っ

た雨が土をけずり、武蔵野台地の場合は西から東に流れる川がいくすじもできました。呑川もそのひとつとしてたんじょうしたのです。呑川は東京湾だったところの中央に流れていた古東京川に流れこんでいました。

そんな時代、人間は住んでいたのでしょうか。寒さと戦いながら東京にも大昔の人が住んだあとが見つかっています。大田区にも久が原や馬込などにおよそ2万5000年前から人間が住んだあとが発見されています。久が原の場合は呑川の近くの台地のへりのわき水がよく出るところに住居を作り、石器を作ったりした人々がいました。呑川では魚をとったことでしょうか。また、オオツノジカやイノシシなども石器を武器として使いしとめたことでしょうか。遺跡からは動物の肉をバベキューのように焼いた石のまとまりも発見されています。

つづく

連載 呑川むかしむかし（2）

大坪 庄吾

海がおしよせてきた

呑川ぞいには大昔の人々の住んだあと（遺跡）がいくつもあります。なかでも貝塚のある遺跡は呑川中流の雪が谷や馬込、久が原の台地で発見されています。貝塚からは牡蠣（カキ）やハマグリ、ハイガイなどの海の貝とともにイノシシやシカの骨が発掘されています。なぜ呑川の中流で海の貝がとれるのでしょうか。

1万五千年ほど前、寒かった氷河時代が終わりをつげ、気温が上がりはじめました。今でいえば「地球温暖化」の時期に入ったのです。そのため南極や北極の氷がとけて海水がふえ、海面がしだいに上がりはじめました。そのため東京湾では今より海面が5～6メートルも上がるようになりました。もっとも海面が上がったのは今からおよそ六千年ほど前です。気温も今より2～3度高くなりました。

人々の生活の上でも大きな進歩がありました。1万年ほど前に土器（どき）が発明されたり、弓矢が使われるようになりました。また石器も改良されやり先のするどいものや動物の肉の加工につごうのよいものが使われるようになりました。

あたたかくなったため、森には温かい地方で育つ植物がしげり、シカやシノシシ、ウサギなど今でも各地に見られる動物がふえました。海にもたくさんの貝類が育ち、なかでも今は南の海にしかみられなくなったハイガイも海辺でとれるよ

うになったのです。

土器には縄目のもようがつけられるようになったため、この時代を縄文時代といっています。今の大田区の場合武蔵野台地のはじのところまで海がおしよせてきたのです。

有名な大森貝塚をはじめ、さきほど紹介した貝塚や多摩川ぞいでは下沼辺貝塚などが、縄文時代の貝塚として知られています。今の大田区の低地にあたる羽田、大森、六郷、蒲田、池上などは海でおおわれました。台地の下には波が打ち寄せたり、谷の奥まで海が入り込みました。海が入り込んできたことを縄文海進といっています。

呑川流域の場合は、海進がもっとも進んだ六千年前から五千年前にできた貝塚のなかに雪谷貝塚があります。2001年にこの貝塚が発掘されてハマグリとカキを多くふくんだ貝がらのまとまりがたくさん見つかっています。

六千年前をさかいに気温は少しずつ下がりはじめ貝塚を作った人々の生活の場は雪谷から呑川のすこし下流がわに移り、久が原、馬込に移ってきます。

人々は台地のはしのところに村を作りました。台地のはしのすこし低い所にはたくさんのわき水がでたからです。台地の奥の方の森に住む動物にとってもわき水のでる水場はかかせないものでした。森に出かけたり、水場に近づく動物を弓矢でしとめたり、落とし穴を作ってつかまえました。台地の下の海岸では貝を拾ったり、舟で沖にでて魚もとりました。このような生活は今から二千年ほど前まで続きました。

およそ二千年ほど前、気候は今と変わらないぐらいになり、海岸線も今の大田区の形に近づきました。呑川は久が原から下流に流れくんだり、上流から運んできた土砂（どしゃ）がしだいに海だった低地をうめていきました。土砂は多摩川からも運ばれ今の大田区の土地ができていったのです。

つづく

連載 呑川むかしむかし（3）

大坪 庄吾

弥生時代から古墳時代へ

低地で米づくりが始まった弥生時代

今からおよそ2000年前、今の大田区に近い土地の形ができあがりました。

多摩川や呑川の上流から流されてきた土砂がつもっていったからです。台地のすぐ下の低地には広いしっ地（水のたまりやすい土地）ができました。このころ日本列島全体に広がったことは、人々が米づくりをはじめるといったことなのです。この時代を弥生時代といっています。

今から1800年ほど前（3世紀ごろはじめ）大田区で米づくりをはじめた人々は大森の山王のあたりに村を作りました。また久が原にも村ができ、久が原の村はやがて大きな村になりました。久が原の村は弥生時代の終わりごろ（3世紀後半～4世紀前半）にもっとも大きくなり、遺跡（いせき～人々のすんだあと）としては南関東最大の村になったようです。

久が原の台地の近くには、呑川と多摩川の運んできた土砂でできた低地に水たまりがたくさんあり、また久が原の台地のはじから豊かなわき水がたくさん出ていました。水田を作りやすい土地だったのです。また台地の上は平らな土地が広がって住居を作りやすいところでした。

久が原の遺跡からは弥生時代の住居あとがまとまってたくさん発掘されています。（住居のあとは千戸以上といわれ、台地の南側はほとんど遺跡になっていません）

久が原では70年以上前の発掘で住居のあとから炭のようになった米粒が発見されています。弥生時代の遺跡は久が原の近くの村や田園調布などで見つかっています。

そのほとんどがわき水がよくでる台地のはじの部分です。低地にはまだ住居のあとは発見されていません。見晴らしのよい台地の上に住居をつくり、台地のすぐ近くの低地で米づくりをしたからでしょう。呑川は米づくりに必要な水を運ぶ川として大切な役目をはたしていたといえることができます。

久が原遺跡のさかんだった時代は、有名な登呂遺跡のできたころと同じです。しかし、登呂遺跡のような水田の跡はまだ発見されていません。

低地に村ができた古墳時代以後

4世紀（紀元300年ころ）に入ると村の中の力をもった人々が、この地域全

体を治めるようになりました。この時代を古墳（こふん）時代といっています。

とくに力をもった人たちは自分たち一族の墓をつくるようになります。台地の上に土をもりあげて作った古墳が多摩川ぞいに作られました。その中の最大のものは長さが百メートルを越えています。4世紀のなかばころに作られた宝来山古墳や亀甲山古墳が多摩川ぞいにでき、7世紀までの間に次々と50以上の古墳が作られました。古墳時代の住居や古墳も久が原から発見されていますが、呑川の下流にも古墳時代の遺跡がたくさんあることがわかっています。

ひえ田神社遺跡、蒲田八幡古墳、あやめ橋付近遺跡など古墳時代の遺跡が知られています。これらの遺跡は呑川ぞいにあることから呑川に近い低地にも人が住み始めたことをあらわしています。

奈良時代から平安時代にかけては女塚貝塚遺跡、十二天東遺跡、下袋遺跡（子安八幡付近）など呑川ぞいの遺跡が発見されています。女塚貝塚のように貝塚をとまなうものがあり、呑川から海に出て貝を採集する生活もあったのでしょうか。女塚貝塚遺跡からは、祭ごとにつかう道具も発見されていることから、人々の平安を祈る行事も行われていたのでしょうか。

呑川は水田に使う水（用水）としても使われ、ゆたかな実りや時々おそってくる水害の不安を除こうとする願いがこめられたことが考えられます。

いまの大田区の低地の利用は古墳時代に始まり、呑川は人々の生活にとってかけがえのない川として利用されるようになったのです。このような水利用は鎌倉時代から室町時代まで続きました。

呑川の水源は世田谷区の桜新町付近から流れる深沢流れを本流とし、駒沢川支流、柿の木坂支流、九品仏川支流をあわせたすべてわき水を水源とした川です、呑川は生活や水田の用水として川ぞいの村々や下流の低地の村で使われていたのです。

つづく

連載 呑川むかしむかし （4）

大坪 庄吾

六郷用水と呑川

江戸時代より前の呑川

六郷用水を作った小泉次大夫のことを書いた記録に、六郷用水を作る前の六郷領の村々（今の大田区）のようすを次のように書いています。

「村々をまわってみると、家数はわずか七、八軒から十数軒の村が多く、ふだんの食事はむぎ、あわ、ひえ、大豆などでとっている。」「多摩川がはんらん（水害）することが多く農民は困っている」「農民たちは、呑川や内川、台地のはしからのわき水を使って水田を作っているが、ひでりのときには作物ができない」ということです。

六郷用水を作る

1597年、用水ぶぎょうとなった小泉次大夫は多摩川下流の農民を集め、多摩川上流の和泉村（いずみ村～今のこまえ市）から水を取り入れ六郷領まで用水を作る工事を始めました。六郷用水ははじめに測量をして水路を決め、1599年から農民たちを使って掘り始めました。1611年に工事は終わり、はじめて多摩川の水が六郷領の村々をうるおすことになりました。

狛江から世田谷領を通過して今の鶉の木あたりから六郷領の村に入ります。矢口村のところで二つの流れにわけ、六郷、羽田の方に流れる水路を南堀用水、矢口から台地のへりにそって久が原、池上、大森の方に流れる水路を北堀用水としました。

南北二つの水路にわけられた六郷用水

北堀用水は堤方村（今の堤方橋近く）で呑川を渡って流れます。この渡し方は六郷用水の水を一度呑川に落とし、少し下流に「せき」（ダムのようなもの）を作って水位を上げ、大森方面に流したのです。その水路の跡が呑川の養源寺橋（ようげん寺）の近くに緑道として残っています。

呑川には多摩川からきた水もまざります。この水は堤方橋のあたりから中土手という川の中に作られた土手で二つの水路に分けられ、双流橋のあたりで一つは蒲田方面に流れ、他方は大森方面に流れます。蒲田方面に流れた水路はさらに二つに分けられ蒲田にある夫婦橋のところで糞谷（こうじや）方面に流れる松葉用水になります。

呑川の水路も六郷用水の水路も網の目のように分かれ、六郷領の村々のすみず

みまでとどきました。養源寺橋より上流の村はすべて呑川の水を使った水田でした。久が原はわき水がたくさん出る村です。それでも道々橋の所に「せき」を作って呑川の水もとりました。また、池上村は洗足池から流れ出る水をわけて用水にしていました。

呑川だけの水では、水田の水としてはたりません。台地からわき出る「わき水」は呑川の兩岸の村ではかかせないものでした。

いのちの水だった六郷用水

ひでりのときには、下流の村々では水がとどかないことがたびたびありました。そんなとき村の代表が集まって水のわけ方を相談します。一度に全部の村が水を使うのではなく一日ごとに使う村の順番を決めて、他の村は水路をとじるようにしました。このきまりを「日わり番水」といいました。もっと水が少なくなると時間ごとに配る村を決める「こく割番水」になることもあります。

それでもきまりをやぶる村があって「水あらそい」がときどき起きています。用水は農民にとって「いのちの水」でした。

呑川や六郷用水の水は、また生活の水としても使われました。朝くんだ水を飲み水として使ったり、くんできてお風呂や洗たくにも使いました。下流では「しじみ」もとれたし、フナや小魚をつって食べることもしていました。

毎年、大雨のときには呑川はよくあふれました。ひがいもありましたが、水田に入った水は短い時間で引いてしまい、家の中まで水が入ることはあまりありませんでした。家は台地がわのすこし高いところに作っていたからです。

(つづく)

連載 呑川むかしむかし

大坪 庄吾

(5) 呑川と水害 ①

水田の多かったころの水害

川には水害がつきものです。これは江戸時代以前からも明治になってからもかわりはありません。

江戸時代の呑川は、用水として水田の水に使われていました。呑川は上流から下流まで水田がありました。大雨が降ると、たちまち呑川はあふれます。しかしそれほど大きな川ではない呑川では、雨が止むと水は早く引きました。時には家の中まで水が入ることはありました。家を少し高いところに作ったり、舟を用意して置いてよほどの水害の時にはひなんすることもあつたそうです。

水害が増える

明治時代になると、呑川のまわりのようすが大きく変わりました。蒲田では、鉄道が呑川の上を通過するようになりました。

東京が首都となり、住宅が次々に増えてくるようになると、呑川の周りも大きく変わっていきました。水田も大正時代（1912年から）少しずつへっていきました。関東大震災のあつた1923年（大正12年）以後は、呑川の上流では住宅が、下流では工場も増えました。

また、水田だつたところが畑になったり、住宅地になってより多くの人住むようになりました。

雨がふると、水田や畑が多かつたころは土に水がしみこむため急に大水になることはすくなかつたのですが、水田や畑がへり、住宅が増えると降つた雨は呑川にどつと集まるようになりました。明治より大正、そして昭和になると、今までよりずっと水害が増えました。

水害の多くは家の中まで水が入る床上しんすいという被害です。

水害をふせぐ努力

関東大震災の前後から呑川ぞいの町では「耕地整理」（こうちせいり）という町づくりが進んでいました。くねくねまがつた道を、まっすぐにしたり、広い道を作る工事があちこちで進みました。

このとき、池上町では、くねくね曲がつて流れていた呑川をなるべくまっすぐにし、川ぞいに道を作りました。川底も少し深くして水が早く流れるようにしました。といつても呑川に子どもたちが入つて魚とりをしたりできる深さでした。呑川は水田のための用水としてではなく、降つた雨水をはやく流す排水路（はいすいろ）に変わつていったのです。

床上しんすい3000戸

1925（大正14）年の夏、大きな水害がありました。池上から蒲田にかけて床上しんすいが3000戸もでるほどの水害でした。

そのころの荏原郡町村議会の議員さんたちが11月、呑川をかんりしていた東京府にたいし「呑川の河川改修をいそいでしてもらいたい」と決議をし、12月の東京府の議会でも「はやく呑川を改修すること」が決められました。

実際の工事はすぐには始まりませんでした。

中土手事件

呑川が用水として使われていたとき、池上の堤方橋付近から今の西蒲田の双流橋付近まで呑川を2つに分ける水路が川の中にありました。中土手といっています。2つに分けた一方は蒲田方面に流れ、もう一方は大森方面に分けていたのです。

水田がなくなると下流で用水をわけるひつようがなくなります。また土手があることが水の流れをじゃまするため、大雨がふると上流の池上町がわの水害がひどくなるのでした。

このため池上町では早くからこの土手をなくしましたが、下流の蒲田町がわはそのままになっていました。「土手をはやくとりはらってほしい」と何回もたのんでいましたが、蒲田町がわはそのままにしていました。

1931年（昭和6年）10月4日、大雨が降ったとき、池上町の人々はみのがさをつけて川の中に入り、この土手をとりはらってしまいました。池上と蒲田の町民がおおぜい出て、大げんかになろうとしましたが、警察がのりだしてさわぎをしずめました。蒲田町もまもなくこの事実をみとめました。

（つづく）

連載 呑川むかしむかし

大坪 庄吾

（6）呑川の水害 （2）

○水害をなくすために

呑川の流域は江戸時代から明治時代（1900年度ごろ）までは水田や畑が多く、その水は用水として米作りに使われていました。

上流では、畑が多く降った雨はしみこんで大雨のときだけ呑川にたくさん流れ込みました。水害は起こりましたが、呑川付近には水田が多く、家が少なかったため大きな被害はでませんでした。

明治から大正・昭和になると上流にも住宅地がふえ、下流の池上・蒲田・糀谷

などでは水田がなくなり、住宅や工場ができはじめました。

大雨がふると上流では畑などにしみこんでいた水が少なくなり「どぶ」（下水）を伝わってどっと呑川に流れ込みます。下流でも呑川に流れ込んでいたたくさんの支流（おもに六郷用水からの排水）もどっと流れ込みます。

そのため1925（昭和元）年からはじまる昭和時代には今までより住宅の床上浸水が多くなり広がっていったのです。

水害をなくそうとして地域の人々は川を管理していた東京府にたいし何度もお願いをしお金（予算）を出して呑川を改修（直す工事）してほしいと努力していました。

※ 1924（大正14）年荏原群町村会議員連盟「土曜会」が改修は東京府が資金をだすべきという決議をする。

※同じ年 蒲田町会でも同じことを決議。

○町でお金を出して改修

東京府にお願いしてもすぐには呑川はよくならないと、蒲田町では町と耕地整理組合がお金を出し合って改修する工事もすすめました。

工事は呑川の川はばを広げ、両岸は板の柵（護岸）を打ち込むという工事でした。

呑川の幹線（本流）だけでなく支流・呑川に流れ込む排水路や用水だったところなども同時に工事をすすめました。蒲田町だけでなく大森町ともいっしょになり工事はすすめられました。

工事は1932（昭和7）年まで続けられ、4割（4/10）を残してほぼ完成し、残りは東京府が引き継ぐことになりました。

この工事の結果、少しは被害をふせぐことはできましたが水害がなくなったわけではありませんでした。

○ 新呑川を掘る

住民の強い願いだった東京府による工事が1931（昭和6）年12月の議会で決定されました。

当時のお金で190万円を事業費（改修工事の費用）として五か年かけて改修するというものでした。（第一期工事）

工事区間は池上養源寺橋から河口までおよそ5km、川はば12.12mからしだいにひろくし夫婦橋付近では27.27mにし、夫婦橋より下流に一直線に羽田の方へ流れる新しい川を掘るというものでした。

いままでの曲がりくねった呑川はそのまま残し、新呑川は一気に海まで流すというのです。水路には羽田の方にあった藤兵衛滞（とうべえみお）という海苔舟な

どが使っていた水路をいかして使うことにしました。

ぐっと広がった川はばの新呑川の工事は、川はばを広げるだけでなく、護岸には鉄筋コンクリートを使い、新しい橋も作る大工事でした。

呑川の下流では東京湾で作っていた海苔の船や利用していましたが、新呑川ができると船着き場や荷物を上げる場所がなくなってしまいます。海苔業者たちは、あらためて東京府にたいし海苔の「てんま船」の引きあげと荷上げ場を作ってほしいと請願（お願い）書を出しました。

この結果、夫婦橋下と呑川新橋下の二か所に共同荷揚場ができました。

いまこの荷揚場のあとは、呑川に近づくことのできる夫婦橋公園と大森南一丁目公園になっています。

第一期工事は1935（昭和10）年に完成し、引き続き夫婦橋から養源寺橋までまで、約2.5kmが第二期工事として始まりました。工費は166.7万円、護岸には板柵（さく）も使われました。

1936（昭和11）年から工事は始まり完成したのは1941（昭和16）年でした。

全体の工事が終わるまで10年もかかり、呑川下流の風景もすっかりかわりました。

ちょうどこのころは、日本が中国と日中戦争をしていた時期で、完成した1941年には太平洋戦争も開始され、お金のかかる大工事はしにくい時代になっていました。工事がもう少しおくれたら戦争のために費用がたりなくなったことでしょう。

これで水害はなくなると思っていた人々はひと安心しましたが、1944（昭和19）年10月の台風で大森・蒲田地区で床上浸水の被害が出るということもあり、不安はなくなったわけではありませんでした。

（つづく）

呑川むかしむかし

大坪 庄吾

（7）直井勝太郎さんからの聞き書き

○直井勝太郎さん

新幹線鉄橋より上流の呑川左岸に、生産緑地の表示のある大きな畑があります。だい

こん、ブロッコリー、小松菜など冬野菜が今はさかりです。

そこで農業をしているのが直井勝太郎さん。古くからの農家で呑川ぞいにずっと住んでいます。直井さんの家(東雪谷5-37)にうかがって昔の呑川についてお話を聞かせていただきました。今回はその中身を紹介しましょう。直井さん12人は昭和5年生まれ、今も元気で野菜づくりにはげんでいます。

○ 戦前の呑川

昭和のはじめから始まった耕地整理以前の呑川は、今の呑川より北側を流れていました。くねくねと蛇行していた呑川を耕地整理の時現在の場所に移しまっすぐにし、川はばも広げました。(改修工事は昭和6年開始) 雪が谷から道々橋までの間には3つの堰(せき)があつて流れを調節していました。

現在の雪谷小付近の堰、水神橋近く堰とその間にも1つせきがありました。水神橋のところには、水神の森(南雪谷 5-10)からの湧水(わき水)の流れが注いでいました。堰のすぐ下は、深くて「ふな」や「はや」がよく取れ、「しじみ」もいました。子どもがよく泳ぐ場所でした。

私の子供のころ水害は何度もありましたが、とくに大きかったのは、昭和13年の夏の水害です。

上流(雪が谷)の方から水がさしてきて、あふれた水は兩岸の田畑に入り、やがてあつという間に床上まで来ました。

水害にはなれていたのでも、水が来るとわかると、まず便所のつぼに新聞紙を何枚も置いて、その上に板を置き、大きな石をのせます。そうしないと水は最初に便つぼに入り流れていってしまうからです。また四斗たるをふせ、いくつか置き、その上にたたみをはがしてのせます。床上に水がきても、たたみさえぬれなければなんとかなります。

水害があると、親戚から見舞いといっておにぎりやおしんこなどが届けられることがあります。ごはんを炊く「かまど」がぬれてしまうと一週間ぐらい使えなくなるからです。

雪が谷の上の方に天然氷を作っているところがありました。そこはふだんは養魚池になっていて鯉を飼っていました。水害があると池があふれて鯉が逃げ出し、私の家の畑に水といっしょに入り、水がひくとアップアップしているのを捕まえたこともあります。水は出るのも早かったですが引くのみ早かったです。

○ 戦後の呑川と水害

私の家は昭和20年の5月の空襲で焼けてしまいました。一時、近くの別のところに住んでいたのですが、またもとのところに戻って今の家を建てたのです。その時は土をも

って少し高くしました。

戦後も何回か水害がありましたが、私の家は床上浸水ということはありませんでした。
(下流では床上浸水が台風の際に起こっていた)

註 昭和22年キャスリン台風

昭和24年キティ台風

昭和25年集中豪雨

水害は戦後の方が多かったですが、いちばん大きかったのは昭和33年の狩野川台風の時です。このあたりで水害の多かったのは、品鶴線(現在の新幹線)ガード付近、池上橋(京浜第二国道の橋)と稲荷橋(池上文化センター付近)でした。いずれも橋が水流をさまたげて水がとどこおりあふれてしまうのです。

私の家は畑がそのたびに水浸しになりました。洗足池から流れてくる洗足流れが、長慶寺(東雪谷5-8)のあたりで直角にまがって呑川に流れ込むのです。このあたりも大雨が降ると水がたまってたいへんなものでした。この場所は明治以前から水がよく出るところで、道々橋村と上池の根方、雪が谷村の境になっているところでした。この土地がどこに入るかで押しつけっこをしたたようです。結局道々橋村が引き受けたといういわくつきの土地だったようです。水害は戦後までたつたのですね。

その後今のように呑川を改修したので今は水害の心配はなくなりました。とくに中原街道の下に地下水路を作って、水が多くなると多摩川に流すようになってからですね。

註 昭和39年から始まった東京都中小河川緊急3ヶ年計画により川幅を広げ深くする工事が行われた。この時の工法が三面コンクリート張りの呑川で、一部工事が完成していない部分(道々橋付近)は鉄板が護岸につけられている。

(註は筆者記入)

(つづく)

呑川むかしむかし

大坪庄吾

(8) 久が原の用水とわき水 中島政治さんからの聞き書き

- 中島政治さん 久が原 2-4-10 在住

道々橋の南側の呑川右岸にそって生産緑地の表示のある畑があります。ナス、にんじん、さといもなどの野菜が植えてあります。畑の世話をしている方は中島政治さん(昭和5年生まれ)宅に伺ってお話を伺いました。中島さんの家は畑の北側のやや高いところにあり、家の北側は武蔵野台地のがけになっています。ずっと農家をしておられ、今は野菜を作っていますが、以前は家の東側は呑川にそった水田で米を作っていました。中島さんの家の前の畑のわきに「農業用洗場」と書かれた長方形の池があり、いまでもこんこんと水がわき出ています。あふれた水は畑の水路に落とされ、すぐわきには蓮と「くわい」が植えられていました。

○ 久が原の水田と用水

久が原の呑川ぞいには戦前までは水田が残っていました。久が原の耕地整理が行われたのは1926(大正15)年からで、そのころの呑川はやや蛇行(くねくねとまがった)して流れていました。耕地整理後はほぼ第二京浜国道のある池上橋まで直線になりました。

呑川の左岸も右岸も水田になっていました。左岸の方は洗足池からきた千束用水が台地のわきを流れ、水田に注いで下池上(今の本門寺近く)で呑川に落されていました。右岸は道々橋のすぐ下流(現在の豊田商店付近)に「せき」を作り水かさを上げてから、取水口を作って取水していました。取水された用水(久が原用水)は台地より東側を呑川にそって流れ、水田に使われていました。水路のあとは今のダイシンの前の道路になっています。水路は大字徳持との境付近で呑川に落されていました。

○ 豊かなわき水も水田に利用

久が原台地のきわにはたくさんのわき水(湧水)があります。呑川の水はいつも豊かに流れているわけではありません。

春から夏にかけて水田に水が必要な時期には上流の水田でもたくさんの水を使います。湧水は水田の補助水としてなくてはならないものでした。久が原には今の天使幼稚園付近にあった五万石という水源、西部八幡神社の近くの水源、本光寺付近からの水源、久原小学校南側からの水源があり、たえずきれいな水がわきでていました。

それぞれの水源から引かれた水路が呑川ぞいの水田につながっていたのです。今残っている水源は本光寺のわき水と中島家のわき水だけです。また、久が原小学校わきからの水路の跡は、久が原図書館の裏に一部緑道として残されています。昭和になってから水田はつぎつぎになくなり、畑になり、宅地や工場になりました。敗戦直後(1945年)まで残っていた中島家の水田を最後に水田はなくなりました。

○ 呑川水害と水田

久が原付近の呑川ぞいはよく水害がおこりました。短時間でも20ミリを越える雨が降ると今よりずっと川はばかさまく浅い呑川はあふれます。あふれた水は水田いっぱいになります。

以前の呑川ぞいの農家は、やや高いところに家があったため水害で家が水につかることはほとんどありませんでした。住宅の多い池上橋より下流は、大雨があると床上浸水になることが毎年のようにありました。あふれた水をはやく排水するために水門がつくれ、水門の上げ下げは近くの農家があたっていました。戦後は何力所かにポンプ場が設けられ、強力なモーターで排水するようになりました。水害は戦後の方が多く、呑川の改修のあった1958(昭和33)年ころを最後にようやくなくなりました。

○ 六郷用水と水田

久が原の南側には六郷用水が流れて水田の水としても使われていました。久が原台地の南側にも湧水が各所にあり、六郷用水に注いでいました。この水路は、今緑道となり「六郷用水物語の道」として残っています。湧水の多くは埋められて残っていません。今久が原に残っている湧水はわずかですが大事にしていきたいものです。

以上